

「ルネッセ」を實踐するための新たな試み 文化講座「上方生活文化堂」を体験報告

取材・執筆＝加藤しのぶ

過去から現代、そして未来へ――
都市や地域社会の価値を再起動し、つないでいく。
今、大阪で「ルネッセ」のひとつの実践例ともいえる文化講座が始動している。
産経新聞社と大阪くらしの今昔館、
大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所が仕掛ける「上方生活文化堂」がそれだ。
実際の体験と関係者への取材を通し、
この講座が誕生した背景や目指すものを紹介する。

く訴えかけるものだった。

大阪の生活文化を学ぶ
「上方生活文化堂」

阪急梅田駅から徒歩10分、マンションやビルがひしめく交通量の多い大通りを一本隔てると、突然、昔ながらの木造2階建て仕舞屋造りの主屋と、それを囲むように建つ15戸の長屋群が現れる。NHK連続テレビ小説『ごちそうさん』の西門家の建物モデルともなった吉田家住宅だ。1921年建造、大正期の都市住宅の姿をとどめる貴重な建物として、国の登録有形文化財ともなっている吉田家の主屋が「上方生活文化堂」の会場となっている。

何ら特徴を見出せないビルや殺風景なオフィスの一室ではなく、通常非公開、今も人が住まう古民家で行われる文化講座は、「場」がもたらす力を最大限に生かした、五感に強

その日は朝から小雨が降っていた。足元のぬかるんだ感触に、この一角だけアスファルト舗装のない土の道であることに気づく。玄関前の手入れされた前庭に、今もここで人が暮らしているという確かな息遣いが感じられた。

玄関を通り、仏間を抜けた先の座敷が会場となる。畳に小さな椅子と机がいくつも並べられたさまは講座然としているが、座敷に設けられた床の間に目を向ければ、そこには掛軸が掛けられ、花入れに季節の花

脇の違い棚に調度品が飾られており、端正な生活の香りに心が安らぐ思いがした。このような時節に寄り添った「しつらい」は、かつて日々の暮らしの当たり前の姿であったが、住空間から床の間が消えて久しい現代の参加者にとっては懐かしく、あるいは新鮮に映るのではないだろうか。暮らしの気配が濃厚に漂う座敷で行われる「上方生活文化堂」は、午前と午後の2部制となっている。第1部の講演は産経新聞社の論説委員であり、生活文化堂のナビゲーターでもある山上直子氏による開会の挨拶に始まった。

まずは大阪くらしの今昔館(以下、今昔館)谷直樹館長による上方生活文化講座。3回目となる12月のテ

マは「大坂の芝居と劇場」。江戸時代、大坂には芝居小屋が建ち並び、上方歌舞伎が京のみならずこの地でいかに華ひらき隆盛を誇ったかを当時の経済状況と絡めて解説、さらに当時流行った上方役者絵がスライドで紹介された。また、今昔館所蔵の役者絵の実物が公開され、日頃ガラス越しで見られない浮世絵を間近で見ることが出来る時間もつくられた。

実は、この講座では今昔館所蔵品の資料を持ち込んで飾られるのも企画の目玉のひとつとなっている。床の間の掛軸は、館蔵品のなかからその月にふさわしいものを選ぶ。この日は四条派の画家菅其翠筆「宇治橋・大坂三大橋図」が掛けられていた。

ほかに二代長谷川貞信が描いた画帖「浪花行事十二月」から、テーマに沿った頁が展示されている。今回は「春待月 顔見世芝居」。春待月とは陰暦12月の異名である。これら展示品の作品解説を担当するのは同館の服部麻衣学芸員。「浪花行事十二月」について、顔見世芝居が、当時の大坂の12月の行事であったこと、揃いの頭巾をかぶった役者のファンクラブともいえるべき「手打連中」がいて、畳の俳優に手を打ったことなど、谷館長の講演内容とも関連させながら、初心者にもわかりやすく読み解いていく。

続く大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所池永寛明所長による「上方ルネッセ講座・大阪の文化戦略」では、大阪には「日本初」のものが多いという事例を提示し、特に近畿発の食文化が豊かであることなどを紹介、こうした文化が生まれた土壌として、17世紀の元禄文化や、18世紀の私塾の隆盛などをあげている。また生玉人形など当時の玩具を実際に動かしながら大阪の「おまけ」文化の発達にも言及した。その後、谷、山上、池永三氏によるディスカッションや受講者との質疑応答が行われ、第一部は終了となった。



吉田家住宅主屋の座敷。床の間や棚、座敷飾りなどの和の住空間に心が和む(写真提供/産経新聞社)。



上/吉田家住宅主屋。木造の高塀で囲まれた大阪町家の風情が今も残っている。「仕舞屋造り」が特徴的(写真提供/産経新聞社)。
下/吉田家住宅の奥庭と土蔵(写真提供/産経新聞社)。



上/二代長谷川貞信筆・画帖「浪花行事十二月」より「春待月 顔見世芝居」（所蔵／大阪くらしの今昔館）。
下/大阪くらしの今昔館が所蔵する菅其翠筆「宇治橋・大坂三大橋図」双幅について解説をする服部麻衣学芸員（写真提供／産経新聞社）。



CELの「ルネッセ」を基軸にした本研究所の池永寛明所長による「上方ルネッセ講座」では、大阪、近畿の文化に対する熱い想いも語られた（写真提供／産経新聞社）。

20名ほどの「上方生活文化堂」受講者の反応は、熱心の一言である。平日昼間の開催とあって、参加者は60代以上のシニア世代が多かったが、講師の話に深く傾き、時折驚きや感嘆の声が上がり、集中が途切れることがない。講義内容への深い関心や吸収力の高さが感じられた。

最初に椿山氏より本日の献立について説明が行われた。毎回テーマに沿った料理を供しているが、「春待月」の献立は、師走の公園で落葉を拾う親子の姿を見て、「親と子の食材」を使うことを思いついたという。テーマにちなみ、冬に旬を迎える鱈の身と白子を使った心身ともに温まる椀物がこの日の一品として出された。美味であることはいうまでもなく、吉田家の庭先に実を付けている千両や南天の枝を箸置きとし、同じ

く庭に実っていた柚の皮を料理に添えるという、店主のもてなしの心遣いが何よりの御馳走となったようである。

「上方生活文化堂」受講者は、大阪、兵庫など近郊在住者が中心だ。受講理由をたずねると「ずっと大阪に住んでいても知らないことがまだまだたくさんある。それを知りたい」「今の大阪は全然だめになっている。昔の面影がなくなったこの町の良さを、再確認したい」などの声が聞か

れた。明確な学びの意志がうかがえ、4時間という長丁場にも疲れを見せることがなかった。帰り際、皆満たされた表情を浮かべているのが印象的だった。受講者にリピーターが多いと聞くと、納得である。

「お笑い」だけが大阪の文化ではない——「上方生活文化堂」開催の背景

第1部の講演でナビゲーター役として講演内容に絶妙な説明を加え、

講師と受講者の橋渡しをする山上氏に、産経新聞社がなぜ「上方生活文化堂」を開催したのか、どういうことを伝えたいのかをお聞きした。

「産経新聞は1933年、大阪で創刊して今年で85周年を迎えます（創刊当時の名称は「日本工業新聞」、後に「産経新聞」）。大阪発祥の新聞として、一貫して大阪文化、上方文化を応援してきました。先の大戦で焼け野原となった大阪では、戦後七十年を経過、古き良き生活文化が失われつつあります。いま一度、大阪・上方文化の良さを見直し、掘り起こしたい。その一環として生活文化を学ぶ文化講座を始めました」

……』と話を置き、『ただ、演劇の近松門左衛門、散文学の井原西鶴を大阪が生まなかったら明治以後の日本文学の伝統はぶいぶいぶいぶいものになったにちがいない』としています。その後、大正から昭和初期に大阪は一時、東京をしのぐ『大大阪』の時代を迎えました。そこには、東京とも京都とも違う、裕福な商人たちを中心とする華やかな大阪文化がはぐくまれ、生活のなかにも息づいていました。しかし、戦争で大阪は焼け野原となり、『家』や『人』とともに、大阪の生活文化もほとんど失われてしまいました」

このまま、かつて大阪にもいいものがあつた、とただ過去の話になってしまふのは悲しいと山上氏は話すと、大阪で生まれ、育ち、著名な文化人を輩出してきた産経新聞としても、自分自身でも、やはり大阪を、そして上方文化を今までもこれからも応援していきたい、そして失われつつある大阪の文化にいま一度、光を当てたいと話す。

なく、幅広い読者に上品で上質な上方文化を知ってもらいたいと、毎月1回夕刊に「上方再見」と題した特集を組み、「上方生活文化堂」の講演内容と連動した記事を掲載している。

ほかに夕刊一面に関西が世界に誇る技術を紹介する「関西の力」、魅力と魔力にみちた京都市内「誘惑する京都」など、大阪、上方の文化を精力的に発信している。

場があつてこそ、文化は育つ

らなのです」

そういう意味で、吉田家住宅を残していく重要性も、難しさも感じている。まずは「ここ大事だよ」と思うサポーターを増やすことが必要と話す。

谷館長も、大阪の都心部にあり、第二次世界大戦で周囲が焼け野原になったなか、奇跡的に空襲を免れて生き残った吉田家住宅の存在は大きいという。

普請道楽だったであろうその時の当主の趣味を反映して、主屋は当時珍しかった2階建て、しかも2階にも床の間と書院を設けている。借家にあたる長屋も、路地に面している場合、道幅ぎりぎりまで家を建てるのが一般的ところ、吉田家の長屋は小さい庭をつくるなど、ハイレベルな住まいの文化が長屋にまで反映されているという。また、数年前の修理工事の際に、長屋にも太い棟木

「司馬が大阪のなりたちについて描いた『大阪の原形——日本におけるもつとも市民的な都市』という有名な文章がありますが、古代から明治維新に至るまでいかにして大阪が日本一の経済都市、商都となったかを語り、その最後に『この大阪が、徳川時代、演劇と文学の中心であったということなども述べたかったが

現在産経新聞では、受講者のみで

「生活の文化」というのは住まいがなくなると急速になくなっていく。京文化が残っているのは町家が残っているか



「上方生活文化堂」の講座をナビゲートする産経新聞社論説委員の山上直子氏（写真提供／産経新聞社）。

など、しつかりした部材が使われていることもわかった。「100年近い歳月を耐えて残った木造住宅という価値は大きい」そうである。

今昔館の所蔵品もこの家に展示することで、特に掛軸などは本来の姿で、ふさわしい季節感、空気感で見てもらえるという。「文化財を保存することも大事ですが、これからは活用することも必要。こういう場で飾ることができると語る。

場があることで文化は育ち、文化財も生きる。「上方生活文化堂」はそういったことも言下に教えている。

過去の記憶をつなぐ

「浪花行事十二月」が伝えること

「浪花行事十二月」を描いた二代長谷川貞信は、初代同様、役者絵や風景画などを得意とした「最後の浮世絵師」と呼ばれる絵師である。

服部学芸員によると本作が描かれたのは貞信92歳、没する前年の昭和14（1939）年とのことである。

「昭和14年といえば、大阪はすでに工業化が進み『煙の町』といわれた頃です。これらの絵は大阪の都市化が急速に進んだ時代に、江戸時代の風俗や祭礼を懐古的に描いたものだと思います。失われゆく過去の記憶を自分の力で残せるものは何かと考

えた時、絵師である自分にできるのはやはり絵を描いて残すことだと考えたのでしよう」

嘉永元（1848）年、幕末に生まれた貞信にとつて、江戸時代の風物は子どもの頃に見聞きした記憶だけがよすがになる。しかし、絵を見ると往時の姿を実見していなくとも、きちんと理解して描いていると感じるそうである。

「それまで続いてきたものがまだ残っている最後の時代だったのでしよう。この後はまた戦争で全て焼けてしまうのですから。特に大阪は新しいものの好きで、古いものを顧みないところがありません。名所絵はあっても風俗絵はあまり残っていない。生きた暮らしをこういう形で残していくという感覚がなかったんです。この作品は大阪が大阪であるアイデンティティとして、今、評価されています」

「睦月 今宮十日恵比寿」「梅見月 野里住吉一夜官女」……祭礼や行事が多く描かれる12枚の画帖のなかで、服部氏が気になるのは「桜月 十三堤草つみ」だという。着物をたすき掛けにした人々が十三の堤で草摘みする牧歌的な風景。当時の行楽として十三堤での草摘みを代表的な行楽にあげる記録はほかに見ることがないそうだが、当時は知名度の高い行事だったのだろうか。それとも、

化であり、対して上方は作法・流儀を重んずる「儀」の文化だといわれる。「たとえば他家を訪れる際、当然のように手土産を持参する上方に対し、江戸には手土産という習慣が少ないというように『もてなし』の意識にも差があったようだ」と池永所長は語る。

「五の膳は見るだけで持ち帰るものだったと思います。それが今のお土産にかわっていったのではないのでしょうか。ひとつのお膳にこれだけの種類をのせるのは大変だと感じま

「料理は片手間でできるものではないです。自分の店で作るとなると、どうしても料理のことで頭がいっぱいになる。たとえば庭の手入れをし



二代長谷川貞信筆・画帖「浪花行事十二月」より「桜月 十三堤草つみ」(上)「睦月 今宮十日恵比寿」(下) (所蔵/大阪くらしの今昔館)。

貞信の個人的な心象風景としては是非とも残したいと描いた、思い出の一枚なのか。想像がふくらむ絵である。「浪花行事十二月」の展示・解説は、美術品を鑑賞し、当時の風俗を知ることができただけでなく、その絵に込められた昔の記憶をも未来へつないでいるのである。

上方の「儀」の文化 ——もてなしの原点

谷館長によれば、「昔の暮らしそのものを理解していただくためには、楽しみの部分が必要。たとえば芝居見物の後料理を食べるといっように

したし、このもてなしをするために一体どれくらいの時間をかけていたのだろうかと思えます。調理条件は今よりもっとしんどいものだったと思うのに、当時これだけの料理を作っていたというのは、にわかには信じがたいですね」という。それでもやるというのが、儀を重んずる上方の気概であったのだろうか。

「料理は片手間でできるものではないです。自分の店で作るとなると、どうしても料理のことで頭がいっぱいになる。たとえば庭の手入れをし

「料理は片手間でできるものではないです。自分の店で作るとなると、どうしても料理のことで頭がいっぱいになる。たとえば庭の手入れをし

むすび

「上方生活文化堂」が目指すことであり、「ルネッセ」の提言を具現化していると感じる。

「上方生活文化堂」は今後も体系的に上方文化を体得できるよう、2018年8月までの講座内容は決定している。

本誌前号（34頁）で、江戸期大阪を中心に一大サロンと文人ネットワークを築いた文人木村兼葎堂をとりあげたのを覚えておられるだろうか。延べ4万人にも超えた人々との交流を果たした兼葎堂。今後この講座が「現代版木村兼葎堂」ともいえるべき開かれた知の交流・実践の場としてさらに発展していくことを願う。



日本料理「かこみ」の店主梶山一希氏による、趣向を凝らした料理「春待月」の献立は、鱈の身と白子を使った椀物(上)、柿掛けなど八寸と刺身など(下) (写真提供/産経新聞社)。